

四国地方版



徳島大学泌尿器科の魅力

徳島大学泌尿器科は、早くから腹腔鏡手術を導入し、副腎腫瘍や腎癌などに對し、多くの腹腔鏡手術を行ってきました。また四国で最も早くロボット支援システム (Da Vinci S) を導入し、300例以上のロボット支援下前立腺全摘除術を施行しています。また先進医療でロボット支援下の腎部分切除術も施行しました。また腎移植、前立腺癌小線源療法、小児泌尿器科、女性泌尿器科、男性不妊などspecialtyにも力を入れています。



若手医師は、クリニカルアナトミミラボで凍結の御遺体を用いた手術トレーニングを行っています。

研究面においても、泌尿器癌に対する分子生物学的研究

やりがいのある泌尿器科

今回、徳島大学泌尿器科の関連病院である愛媛県立中央病院泌尿器科に勤務している塩崎啓登先生の活躍している様子を伝えてもらいます。

愛媛県立中央病院泌尿器科の塩崎啓登です。私自身、医師5年目であり泌尿器科医になつて3年とまだまだ経験は浅い身ですが、泌尿器科はものすごくやりがいのある診療科であることを実感しており、泌尿器科の魅力を少し紹介したいと思います。

泌尿器科の醍醐味

まず、なんといっても泌尿器科の醍醐味は、初診で来院された患者さんを検査から診断、治療まで一つの診療科で完結できることです。治療といつても、内科的な薬物療法に始まりロボット手術や腹腔鏡手術などの内視鏡手術、開腹手術など様々です。私自身は、手術に興味があり泌尿器科を目指しました。

現在の病院では、経尿道的膀胱腫瘍切除術や包茎手術から始まり、数時間かかる腹腔鏡下腎尿管全摘除術、10時間近くかかる膀胱全摘除術および尿路変向術といった大手術まで、上司の先生の指導のもとたくさんの手術に関わり、貴重な経験を積ませていただいております。

このようにロボット手術などのハイテクノロジー手術から小さな手術まで広い範囲で

関わるができるのが泌尿器科です。

進行性癌の患者さんと接して

進行性の癌患者さんを受け持つことも多く、「人の死」に立ち会う機会が自然に増えていき、たくさん悩むこともありましたが、不幸にも亡くなつてしまふ患者さんのご遺族の気持ちを考えれば、本当につらい気持ちになったこともありますが、その際にご遺族から感謝の気持ちを述べていただくこともあります。その人の人生の最期の瞬間に携わることが出来る泌尿器科は、やりがいがある一方、重責の在る診療科だと思っています。

学会参加の魅力

学会発表はもちろんのこと、新たな出会いや学会開催地の観光など楽しいことが目白押しです。うまく発表できた後の達成感は特別であり、それがまた自分のモチベーションにもつながります。

今年は、ドイツでのヨーロッパ泌尿器科学会で発表する機会がありました。これまで自分が頑張ってきた内容の演題が受理された時の喜びは格別

で、今でも鮮明に覚えています。発表が終わった後、少し悔しい思いもしましたが、その思いもまた「次こそは!!」と自分を成長させてくれると思います。また、学会が終わった後はドイツ観光もしつかりすることができました。

仕事を楽しむ秘訣

最後に、自分がいつも心がけている仕事を楽しく「秘訣」をお教えしたいと思います。常に「感謝」の気持ちをもちて仕事をする事です。上司、自分の家族、看護師さん、技師さん、患者さん・そのご家族に対する感謝。この気持ちをもって仕事をすれば大抵のことは上手いくはずですよ。皆さん！泌尿器科は本当にやりがいのある診療科です。ぜひぜひ一緒に日本の泌尿器科を盛り上げましょう！（愛媛県立中央病院 塩崎啓登）



四国地方版



先輩に憧れて入局

2010年4月香川大学医学部附属病院の卒後臨床研修をスタートし、そのうち泌尿器科研修を半年間選択しました。

そもそも、なぜ泌尿器科なのか。それは3年生の研究室配属（本学でいうところの課題実習）が泌尿器科だったからです。一言で言うと、泌尿器科医は格好良く見えました。6年上のバリバリ働いている女医さんもいて、憧れを抱くとともに将来の自分の姿を重ねてみたりしていました。

そしていつのまにか、泌尿器科医になるという、思い込みにも似た目標を自分の中に作り上げていました。

いよいよ後期研修



話は戻りますが、卒後臨床研修の2年間を終え、香

川大学泌尿器科への入局宣言を行い、いよいよ後期研修がはじまりました。最初の2年間は市中の関連病院で、あとの2年間は大学病院で後期研修をしました。

私の1週間は、月曜朝の医局会から始まります。月、水が手術日で、それ以外は外来診察日です。外来日には処置室で検査を行っています。エコー検査、膀胱鏡検査が主ですが、皮下注射や膀胱内注入療法、留置カテーテルの交換など処置も豊富です。透視室での検査や処置も担当しています。初診から検査を経て入院し、手術を行う、そして退院後の外来フォローまで、一連の経過をみられるのが泌尿器科の特徴だと思います。

腹腔鏡技術認定医を目指して

手術では、泌尿器科医4年目の今は、納得いく経尿

道的手術をできるよう努力しているところです。経尿道手術や手術は泌尿器科の醍醐味です。また腹腔鏡手術では、スコピストばかりでなく術者の機会もいただけるようになってきました。



学生時代には、腹腔鏡手術は選ばれた人しかできないというイメージがありました。しかし、この10年間で当院の腹腔鏡認定医は7名となり、今は私の3年先輩の先生が強化選手として泌尿器腹腔鏡技術認定医を目指しているところです。今やロボット時代、当院

でも、症例数は激増しています。腹腔鏡の次は、ロボットのサーティファイケートをという日も遠くない未来かもしれません。

専門医合格とこれから

泌尿器科医5年目を目前に、なんとか専門医試験に合格できました。同期2名とともに、開校以来の専門医全員合格神話を崩さずにすんでほっとしています。

これまでは泌尿器科専門医取得が大きな目標でしたが、次の目標を立てなければなりません。それは現在模索中です。ただ、泌尿器科医となつての4年間を振り返ってみて思うことは、泌尿器科は奥が深い、そしてこの科を選んでよかったです。まだまだ勉強することとは山積ですが・・・。
(香川大学 山崎真理)

四国地方版



愛媛大学泌尿器科学講座の特色と魅力

やりたいことができる

For Next Uro-Generation

できる環境です。

臨床、研究における国内外への研修や留学など希望に応じて積極的に支援しています。

しつかりした研修システム

四国の大学で唯一の低侵襲手術トレーニング施設が

あり、毎年愛媛県のみでなく四国の泌尿器科医が動物（ブタ）を用いて腹腔鏡のトレーニングを施行してきました。日本泌尿器内視鏡学会が定める研修として認可されており、多くの泌尿器内視鏡認定医の誕生に貢献しています。

最近では学内に手術手技研修センターが設置され、生体に近い状態のご遺体（Thiel法で固定）にて手術手技研修をすることが可能になりました。指導医のアドバイスのもとで解剖や膜構造を理解しながら、減少傾向である開腹手術を若手医師に体験して貰っています。

高度な医療や新しい治療の実践



愛媛大学は、西日本ではじめて最新のロボット手術システム（ダヴィンチS）を導入しました。また、愛媛県は日本で最も人口に対する腎移植件数の多い県であり、愛媛大学でも年間15例前後、現在までに総数242例の腎移植を行ってきました。ホルミウムヤグレーザーによる治療としてf-TUL、TAP（TUL assisted PNL）、HoLEP等積極的に取り組んでいます。

（愛媛大学 柳原 豊）

研修医からの一言

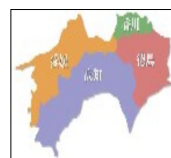
僕が泌尿器科を目指すそうと決めたのは、ポリクリで様々な科を回り終わったころだと思っています。医学部を受験するころは、子供が好きなため小児科を希望していました。しかし、実習の際に手術というものに初めて触れ、外科系に興味が移っていききました。それまでに受診をしたことがあった眼科や耳鼻科・整形外科なども考えておりましたが、中でも泌尿器科は透析など内科的な面もあり、開腹の大きな手術から経尿道的手術・小児泌尿器科手術などの細かい手術・シャント術等いろいろな種類の手術があり、興味を持ちました。また、ロボットも導入されテレビゲーム世代の僕としてはさらに興味をひかれました。泌尿器科を目指すにあたり、どのような研修をしたらいいか相談したところ「研修期間すべてで泌尿器を回る必要はなく、いろいろ

るな科を回り吸収して最後に泌尿器科で役立ててくれればいい」とのお話しをいただいたため、一般外科・腎臓内科だけでなく周術期の全身管理にかかわりそうな内科、麻酔科や病理診断部なども回りました。最終的に、研修医2年目に泌尿器科を回っております。先生方も優しく、わからないことがあれば親切に教えていただけ、手術でもオペレーターをさせていただける機会もあり、非常に充実した研修をさせていただいております。本当にいろいろな領域があり、これからの勉強が楽しみです。

（愛媛大学 新井 欧介）



四国地方版



有意義なレジデント生活

For Next Uro-Generation

ております。

大学病院は症例の偏りがなく、様々な疾患を経験でき、泌尿器科専門医の取得に向けて有意義なレジデント生活を送っております。

私の泌尿器科志望理由

私は現在、高知大学医学部泌尿器科に勤務しております。卒業後5年目の泌尿器科レジデントとして、外来補助・放射線検査・泌尿器科手術を行っております。経尿道的手術や腹腔鏡手術にも積極的に参加しております。

私が進路として泌尿器科を選んだ理由として2点あります。1点目は、私が他大学を卒業した後に医学部へ入りなおしたためです。同級生よりも遅れて医師になったため、専門性の高い診療科で自分の得意分野を作りたいと考えました。全国に医師は約30万人おりますが、泌尿器科医は8千人ほどしかおりません。高知県は日本でも有数の高齢化県であるにも関わらず、泌尿器科医は100名に満たない現状です。現在、僻地と言われる地域の病院へ診療応援にも行っておりますが、泌尿器科医の必要性を日々実感しております。

2点目は、大学での指導

教官との巡り合わせ・部活動の経験が泌尿器科へ進む大きな理由となりました。私は学生時代に野球部に所属しており、多くの先輩も泌尿器科へ進んでいました。顧問の先生が泌尿器科教授であり、学生時代を通じて泌尿器科の魅力を伝えて頂きました。臨床研修医の間も、泌尿器科医になることを見据えた研修を行うことができました。



臨床も研究も指導が充実

私の所属している高知大学医学部泌尿器科は、臨床だけでなく研究に関する指導も充実しております。学位を有する先輩に指導して頂き、学会での演題発表も積極的に行っております。臨床に追われる日々ですが、医師として必要なリサーチマインドも身に付くと考えられます。

医局内は垣根がなく、若手を積極的に育てる風潮があるため、難しい症例の治療経験を若いうちから積むことができます。残念ながら現在はレジデントの数が少ないですが、逆に考えれば1人に当たる経験症例数が多くなるといった良い面があります。

泌尿器科の魅力

泌尿器科の魅力は、外科的な診療に留まらず、透析や排尿機能に関する診療といった内科的な側面もある

ことだと思えます。専門性が高く、医師数が少ないこともあり、どんな地域へ赴任したとしても必要とされる存在となります。まだまだ経験年数は浅いですが、泌尿器科医になって良かったと日々実感しております。

当面の目標は泌尿器科専門医の取得です。今後とも努力を重ね、泌尿器科専門医として社会に貢献していきたいです。

(高知大学 刑部博人)

